

2004 年度冬季研究会報告

テーマ：琵琶湖疏水の今－京都の水利用を考える－

秋山道雄（滋賀県立大学）

今年度は、前回ニュースレターの研究会案内で触れたように、昨年度の研究会におけるテーマが水政策に関する総論的な内容であったため、今回は少し趣向を変えて各論から迫ってみようということでテーマを構想することになった。本会では、3年前の研究会で伏見の水と酒造業をとりあげた経験があり、それを踏まえて今回は京都市全体の水利用にかかわる問題を対象にしてはどうかという案が企画段階でもちあがった。種々検討の結果、琵琶湖疏水へ行き着くこととなったというのがテーマ設定の背景である。

琵琶湖疏水は、日本の近代化過程においてもっとも早い水資源開発の事例とみられているが、本会では学会が発足して間もない1980年代に南禅寺の水路閣を見学に行った以外に、これまで疏水についてはほとんどとりあげてこなかった。そこで今回は、疏水の建設をめぐる論点から始まって現在の疏水利用を概観し、これらを踏まえて将来の方向性を議論するという企画をたてた。あわせて、翌日には疏水をめぐる現地踏査を行なうことにした。

[3月5日・第1日目]

報告者に関しては、岡山大学環境理工学部の小野芳朗氏と京都市上下水道局の富森幸昭氏に依頼することとなった。小野氏は、すでにPHP新書で琵琶湖疏水を扱った『水の環境史』を執筆されているので、今回の報告者として適任である。また、京都市における水利用の現状について考えるためには、京都市水道の現状に詳しい方に報告願うのが望ましい。そこで、本会の会員である京都市上下水道局の野村会員から紹介を頂き、京都市水道部の富森幸昭氏に報告を依頼することとなった。どちらも本会の会員ではないが、今回研究会の趣旨をご理解のうえ、報告をお引き受け頂けた。さらに、御両名の報告後、本会の小幡範雄会員が報告内容を敷衍する形でコメントをし、これらを踏まえて伊藤達也会員司会のもとで全体討論を行なった。参加者は、22名である。

第一報告者の小野氏は、「疏水建設と京都市上下水道」というタイトルで、まず著書の執筆背景から説明に入った。本題でのポイントに移ると、近代水道の成立にコレラの流行が関わっているという指摘があった。それは、「コレラの流行がなければ、近代水道はできなかった」という発言に象徴されている。近代水道とそれまでの水道の違いは、鑄鉄管を使用して周囲と完全に遮断された形で送水されたこと、圧力管で送水されたこと、にある。それゆえ、近代水道は安全であった。ところで、江戸時代には、「水は京か大坂か」といわれたほど、京都や大阪の水は良い水であった。京都で都が千年も続いたのは、水量と水質が良かったからであるというのが、小野氏の理解である。京都では飲料水として地下水を利用していたが、地下水がよいというのは、土の間を通ってくるので、要は土がよいということである。ただ、水に含まれる成分をみるとかなりの差異があり、結局のところ、よい水とは使う人の評価によって決まる。

本来、水の量と質にはあまり問題のなかった京都において、近代水道がなぜ入ったのかという問いに対する答えが、前段冒頭で触れた「コレラの流行がなければ、近代水道はできなかった」というものである。この間の経緯は著書でも詳しく触れられているし、今回

の報告でも立ち入った説明があった。1895年に開催された第4回内国勸業博覧会が、コレラと関わって京都にあたえた影響は大きいものであったということが理解できる。祇園祭がコレラのせいで、地元本来の祭りから観光客を意識した祭りすなわち観光資源へと転化したという説明も、水道と関わらせて聞くとまた違った風景が見えてくる。

伝染病対策として近代水道が建設されたという解説には、補足説明が必要である。実のところ、明治時代には伝染病対策として上水道を建設する案と下水道を建設する案とがあった。両者ともに公衆衛生の観点から早期の建設が主張されたのであるが、結果的には上水道が優先された。その理由は、公衆衛生の観点よりもむしろ水力発電の建設計画とセットになってこの問題が判断されたことによる。この辺りの経緯について、詳細は小野氏の著書を参照頂くと周辺の状況を把握することができる。京都での水道普及の裏には電力会社の意図があったとはいえ、結果的にそれまで市内にたくさんあった井戸が使われなくなり、水源を水道だけに頼るという状況になってしまった。水利用の多元構造から一元構造への転換が、今日に至る京都の水利用の問題点となっている。

小野氏の報告が疏水建設の背景とその後の経緯に焦点が置かれていたのに対して、第二報告者の富森幸昭氏からは、「疏水の水利用と京都市水道の現状」というタイトルで現在の京都市水道の現状について多側面にわたる紹介を頂いた。京都市上下水道局が作成した『京の水道』や『琵琶湖疏水』というパンフレットをもとに、パワーポイントでの写真も加えつつ、水源の疏水取り入れ口から蹴上浄水場に至る疏水経路の状況や4つの浄水場の機能分担などについての解説があった。翌日、疏水周辺の現地踏査があるのを踏まえて、その参考となる見所なども紹介頂いた。現在、水道事業が直面している大きい問題は、水が売れなくなっていることであるという説明は、参加者に臨場感をもって受けとめられたようである。この問題の背景は単純ではなく、研究のうえからも注目されるところであるが、当学会が発足した頃水道事業が抱えていた問題とは位相を異にしてきたことを伺わせる報告であった。

今回の報告に対して、小幡範雄会員からコメントが出された。主に小野報告に対して、疏水建設の経緯を通して水のもつ多様性・総合性をわかりやすく提示頂いた点、さらに京都市の道路整備・市街地の拡大・上下水道の整備といった事象が相互に関連しときには絡まりつつ展開してきた点の説明、などは歴史的な事実の積み重ねを丹念に追っていくことで達成されたものであろうとの評価を行なった。さらに、琵琶湖疏水のような相当の費用を要するプロジェクトでは、予算がどう確保されるかがポイントで、上水道が先か下水道が先かという論争も、こうした点をベースにおいてみると良く問題がみえてくると指摘した。最後に、今回の報告のもととなった著書のタイトルは『水の世界史』となっているが、水資源・環境学会でも環境史に関する研究プロジェクトを立ち上げたらよいのではないかという提案がなされた。この提案は、今回の研究会から派生した積極的な動きではあるもので、今後研究活動を企画する際視野に入れておいて良いのではあるまいか。

2つの報告とコメントを踏まえて、全体討論が行なわれた。琵琶湖疏水の感謝金として、現在、京都市から滋賀県に2億2000万円が支払われているという説明を受けて、水利権の性格や水の貨幣的評価に関して種々の議論が展開された。琵琶湖疏水は、今日のような水資源開発が行なわれる以前に実施されたものであるだけに、現行の水利権取得と同列には論じられない部分があるが、一方、今日の体制ができあがる前に行なわれたものである

だけに今日の体制の歴史的性格をとらえるひとつの手がかりを示していることも確かである。このあたりは今後の研究の展開を期待したいところである。また、小野報告では地下水という水源を放棄して琵琶湖疏水に一元化したのは問題であるという指摘があったが、現状は大口使用者が井戸を掘って水源を転換するという現象が起きており、それが水道事業で水が売れないという事態にも反映している。小野報告が指摘しようとしたのは、小口使用者である京都市民の水利用のあり方を問うことであつたと思われるが、現実の進行はこの方向とずれが生じている。このあたりは、問題の構図を腑分けして、いくつかの側面から検討することが必要であろう。今後の研究課題を相互に確認したという点で所期の目的を達成しえた研究会となつた。

[3月6日・第2日目]

2日目は、午前9時に大会会場であつた関西電力共済会館・京都会館に集合(参加者10名)し、そこでコーディネーターから説明があつた。配布されたレジュメにもとづき、山城盆地やその北半分にあたる京都盆地の土地条件とその形成過程、さらにこれが地下水の賦存状況を規定するという構図の説明、また琵琶湖疏水が建設されたあとの産業立地や輸送条件の変化に関する説明、といった話が展開した。ここでは、前日の研究会のテーマであつた京都の水利用では直接触れられなかつた事象に関する説明が主体となつた。その後、疏水に沿ってインクラインまで歩き、まず蹴上浄水場を訪問した。場長から浄水・配水過程に関する説明を受け、その後場内を見学した。浄水場は、場の性格上、いつでも見学できるというものではないが、今回は野村会員の取り計らいもあつてかなり子細に場内を見学することができた。その後、疏水の流れに沿って琵琶湖疏水記念館を訪れた。蹴上浄水場で時間を費やしたため、記念館はやや駆け足の嫌いがなくてもなかつたが、それでも参加者の中には熱心に質問をする人がいて、学会の現地踏査らしい展開となつた。最後に、記念館近くの南禅寺・水路閣にでかけて現状を視察した。今回の対象は、京都であるだけにすでに何度も見学をした会員もいるが、前日の研究会報告を受けて見学するとまた違った点を見ることができたようである。一方で、初めて現地を見たという方も複数人いて、それぞれに意義をもつ現地踏査となつた。